



今月の予定

聖歌練習

名古屋:聖体礼儀後、18日代式後

・降誕祭(24/25)の練習を始めました。ことしは降誕祭が土日にあたります。多くの参加をお待ちします。

半田:12月14日(水)12時ごろから

・降誕祭の練習をします。

名古屋指揮当番

4日ピーメン松島 10日24日エレナ広石 25日マリア松島

ズナメニ研究会

今月はお休み。11月16日にギリシアでビザンチンチャントを修めたルキア舟橋さんよっての講習会が行われ、ビザンチンの音階、旋律、記号などを学びました。講習の要旨は冊子およびインターネットで掲載するように準備中です。

知って祈ろう - 奉神礼は面白い

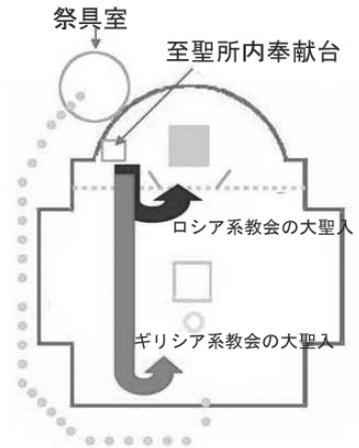
大聖入 (奉献)

大聖入(奉献の行進)はもともとは、別室で整えたパンとぶどう酒を、献げ物をする祭壇(宝座)に運ぶ行列で、今は奉献礼儀は聖体礼儀が始まる前に至聖所内の奉献台で司祭が一人で行う奉献礼儀(プロスコミディア)は、大聖入の直前に行われていました。今も主教祈祷には古い形が残っており、ここで主教による聖パン記憶が行われます。

行進も今は至聖所の北門(向かって左)を出て、ソレヤの中央に立ち「願わくは・・・」と記憶の祈りを唱え、王門を通過して至聖所に戻り、宝座に安置する形に縮小されましたが、ギリシア系の教会ではかつての形をとどめて、北門を出た行進はまっすぐ啓蒙所に向かい、聖堂西端の入り口から向きを変え、至聖所に進み、「願わくは・・・」という記憶の祈りも行進しながら唱えられます。ちなみにギリシアでは「王門」はイコノスタスの扉ではなく、聖堂の西端正面入り口の門を指し、イコノスタスの扉は「美しい門」と呼ばれます。

祭品を運ぶという実際の奉献行列に、歴史の中で、ハリストスの受難、埋葬、墓、などさまざまな象徴的な意味が加えられ、それを反映して儀式も拡大してゆきました。これにはキリスト教が公認国教化され、万民すべてがクリスチャンとなっていく中で、洗礼を受ける覚悟、ご聖体を頂くことの意識が低下していったことが背景にあります。教会は洗礼を勧め、ご聖体への敬意を促すために「畏れ」の念を強調しましたが、逆に、洗礼後に罪を起こすのを畏れて洗礼を死の間際まで先のばしたり、ご聖体への「ふさわしくなさ」が強調されるあまり領聖を敬遠する傾向が生まれて、至聖所で行われる聖職者の儀式とそれを傍観する信徒という構造ができてしまいました。教会はその事態を憂慮し、礼拝上の儀式と聖書の記述を結びつけ、さまざまなシンボリックな解釈を行い、信徒の関心を高めようとしてきました。

たとえば5世紀のモプシュアスティアのテオドルは、捧げ物が宝座に置かれるとき、ハリストスの受難と犠牲を思い描くように勧めました。このころから「ヘルビムの歌」が歌われるようになりました。表信者マキシマス(7世紀)は「この世の慮りを退くべし」に比喩的な解釈を与えと倫理的回心を訴えています。8世紀の総主教ゲルマノスになるとリピダは天使の羽、大気はハリストスを巻いた布といった具合に祭具や所作の一つ一つが意味づけされました。14世紀のニコラス・カバシラスは聖体礼儀をハリストスの生涯と見るシンボリズムを用いながら、領聖を強調しています。



ギリシア系教会の大聖入。至聖所に戻っていくところ

参考文献

『ユーカリスト』A.シュメーマン著、松島雄一訳、新教出版社
Wybrew, *Orthodox Liturgy*, SVS
P.Meyendolff, 『聖体礼儀解釈の変遷』講演録
<http://www.orthodox-jp.com/maria/PM-Liturgy.htm>
Cabasilas, *Commentary on Liturgy*, SVS



ガードナーの『ロシア正教会の聖歌』は世界中で広く読まれている正教会聖歌の入門書です。ここでは現代日本の状況に合わせて適宜省略、解説を加えてご紹介しています。カリストス主教のFestal Menayon Lenten Triodionを参考にしました。

先備聖体礼儀

先備聖体礼儀は聖体機密の規程も聖変化も含まれないので、厳密な意味で「聖体礼儀」とはいえませんが、聖体礼儀が平日行われない大齋中の水曜日と金曜日、受難週の月、火、水曜日に晩課に引き続きいて行われる「領聖」の儀式です。

まず九時課の後、時課経の「聖体礼儀代式」の「真福詞」から(142ページ) 唱え、晩課に続きます。

晩課は「平日晩課」の形で、大連禱の後、第18カフィズマが読まれます。カフィズマの聖詠は3つのスタチア(段。119聖詠から123聖詠が第1段、124-128聖詠が第2段、129-133が第3段)に区切られ、スタチアごとに「光荣は・・・」「ア riluy ya・・・」が読まれ、続いて小連禱が祈られます。誦経者がカフィズマを読む間に司祭はご聖体を宝座上から奉献台に移動する所作があるので、誦経者はその動きを見計らいながら読む必要があります。『大齋第1週奉事式略』では聖詠が省略されていますが、本来指定されている聖詠をすべて読めば、至聖所での準備の時間を十分満たすことができます。

晩課の「主や爾によぶ(140聖詠)」、聖入(「聖にして福たる」)に引き続きその日のポロキメンが歌われ、「創世記」「箴言」が読まれます。その後、ふたたび「願わくは我が祈りは(140聖詠2.)」が特別のメロディで歌われます。この歌は大ポロキメンの形をなしており、ソロが「願わくは・・・」を歌った後、聖歌隊が同じ句を歌い、続いてソロは次の句「主よ我が口に・・・」を歌い、聖歌隊は「願わくは・・・」を繰り返す、最後にソロが「願わくは」の前半を歌い、聖歌隊が「我が手を挙ぐるは・・・」を歌ってしめくります。受難週ではこの後「福音経」が読まれるので、ポロキメンとしての形がはっきり表れます。

先備聖体礼儀で特徴的なのは通常の「ヘルビムの歌」の代わりに「今天軍は見えずして・・・」が歌われること、聖変化がなく、信経からいきなり天主経、領聖へと進むことがあげられます。

領聖詞は33聖詠から取られた「味わえよ、主の如何に仁慈なるを見ん、ア riluy ya」。最も古い領聖詞として知られています。

先備聖体礼儀の式順

1. 始まりは通常の晩課の形、但し晩課の3.の聖詠経のカフィズマは常に第18カフィズマが読まれ、これを3段に分け、段ごとに小連禱。
2. 晩課の聖詠(140, 141, 129, 116)の最後に10スティヒラを歌う。
3. 晩課の聖入「聖にして福」、第1のポロキメン、第1パレミヤ(創世記、受難週は出エジプト記)、第2パレミヤ(箴言、受難週はイオフ書)。
4. 140聖詠の4句からなる「願わくは我が祈りは」の歌に、第1句「願わくは」を附唱(リフレイン)として繰り返して歌う。通常ソロ、またはトリオの歌い手が聖堂中央で歌い、附唱を詠隊が歌う。
5. シリアの聖エフレムの祝文。司祭が唱える(ギリシア系教会では伏拝のみ)。
6. 重連禱、啓蒙者の連禱、信者の連禱
7. 「今天軍見えずして」を歌う。この時、先に聖にせられた祭品が奉献台から宝座に厳粛に運ばれる。この歌は金ロイオアン、聖大ワシリーの聖体礼儀のヘルビムの歌の代わり。エフレムの祝文(ギリシア系教会では伏拝のみ)。
8. 増連禱
9. 天主経を歌う。
10. 領聖詞(「味わえよ、主の如何に仁慈なるを見ん」33聖詠)を歌う。
11. 信者の領聖。以下は金ロイオアン、聖大ワシリーの聖体礼儀の形に従うが、詞とメロディが若干異なる。

ホームページのご案内

○ 「なごや聖歌だより」のホームページ

<http://www.orthodox-jp.com/music>

なごや聖歌だよりのホームページの表紙で名古屋教会の聖歌が聞けます。

○ 東方正教会の聖歌 <http://www.orthodox-jp.com/maria>

詳しく学びたい方のため正教会聖歌の特徴、聖歌の神学、歴史、など海外の資料も多数翻訳して掲載しています。

○ 正教会奉神礼研究 *Liturgia*

<http://www.orthodox-jp.com/liturgia> 奉神礼や聖歌の実践資料